

続神道大系朝儀祭祀編

小口雅史他編

『一代要記』(一)(二)(三)

森田 悌

本書は、続神道大系五〇巻の掉尾を飾るものとして刊行されており、校勘には実績を有する気鋭の小口雅史、小倉慈司、石田実洋、大塚統子の四氏が当たっている。三分冊からなり、第一巻には『一代要記』の成立、伝来、性格等全般に渉る小口氏の解題が付され、第二巻には小倉氏による諸伝写本についての詳細な検討結果が記されている。

云うまでもなく『一代要記』は後宇多天皇の時に成立し、その後鎌倉時代末花園天皇の代まで書き継がれている年代記である。天皇ごとに漢風諡号を示し略歴と治政期における重要事項等について記し、上皇・皇太子・後宮・摂関・大臣・大将・納言・検非違使別当・参議などに関し記載し、皇親については系線により系譜関係が判るようになっており、過去の朝廷についての要目を簡単に知ることができる、朝廷人士にとり甚だ便利な本であった。新訂増補国史大系では『帝王編年記』が年代記として採られており、この手の物はかなり伝来しているが、その中でも『一代要記』は尤なる存在と云ってよいだろう。

『一代要記』の刊本としては明治十七年に近藤瓶城により史籍集覧本の一として和装本が出版され、同三十三年に洋装改定版が出され、後者は昭和五十八年に臨川書店から覆刻版が刊行されている。従前研究者が

『一代要記』を見る必要がある場合は専らこの改定史籍集覽版に当たっていたのであるが、この本の校訂は必ずしも行き届いているとは云えず、信頼するに足る校本の公刊が待たれていたのであった。今回の統神道大系本の刊行により長年の渴望が癒されることになったと云えよう。

改定史籍集覽本は水戸本を書写校合したものを原本とし作成されているが、統神道大系本は水戸本を含む諸伝写本の祖本（金沢文庫本）である東山御文庫本およびそれから分離した高松宮家本断簡を底本とし、長沢本その他を参照して校訂を行っており、現在求め得る最善本となっていると評してよいだろう。古典籍の版本作成に当たっては正確な文字の再現が何より重要であるが、この点において本書は真に信頼できるものとなっている。皇親の系譜関係についても改定史籍集覽本では不完全な形でしか示されていなかったが、本書では整備された系統で示され、原『一代要記』がそうであったであろう一大皇親系図となっている。更に原本復元に終らず本書の特筆すべき点として、要所々々において校訂や解釈に関わり注記が施されており、校勘者の詳細な調査により関連史料についても知ることができるようになっていくことがある。改定史籍集覽本では校異を含め極く僅かな注しか記されていなかったのであるが、本書では、例えば『続日本紀』の記事との異同等が丁寧に示されていて、読解するに当り甚だ親切なものになっているのである。

『一代要記』は年代記の尤なるものとして、既述した如く朝廷人士にとり便利な書物であったが、現代の研究者からみれば必ずしも常時参照すべき本とは云い難いと云わざるを得ないだろう。筆者が古代史研究者であるので六国史と交錯する時期に限っていえば、当該期については六

国史が詳細な記事を伝えており、公卿の人事動向に関しては『公卿補任』により詳しく知ることができる。抑々『一代要記』の記述の多くは六国史や『公卿補任』に拠っているとみてよいのである。従って同じことであるならば『一代要記』でなく六国史や『公卿補任』により立論するのが正論なのであるが、丁寧に『一代要記』に当たっていくと六国史や『公卿補任』では記述し得ない記事があり、研究者の立場からすると正にここに本書の価値があるのである。勿論そのような記事は本書中において少ないと云わざるを得ないのであるが、元来古代史料が限られていることを顧慮すれば、少ないとはいえ六国史等に見えない本書中の記事は誠に珍重すべきものである。この点については解題で小口氏が述べているところであり、一例を挙げれば謂ゆる長屋王家木簡中にみえる子女名が本書中にも記されており、これより実体追究のための一手掛かりとなり得るように思われるのである。六国史の時代を降るが、本書後冷泉天皇朝の記事に超新星爆発を伝えるものがあり、他の史料との関連で従来から注目、検討されてきている。

即ち従来から要注目、要検討に値する記事が本書中に散見しているのであるが、筆者が本書を読んでいて面白くかつ啓発をうけた一つの記事に触れておこうと思う。それは天武天皇の項で、高市皇子の子として交通王、長屋王、鈴鹿王が挙げられている箇所である。改定史籍集覽本には交通王はみえず、この人物に相当する箇所には、

矢通王 大津皇子子
謀叛賜死

という文辞が措かれている。以前筆者は右の記述を読んで長屋王の兄弟には後に知太政官事となる鈴鹿王とは別に矢通王なる王がいたらしいこ

と、但しこの人物は『日本書紀』『続日本紀』にみえず『一代要記』のみから知られ、注記より大津皇子の謀叛事件に巻きこまれ刑死した、と解していたのであるが、本書をみると、

交通王 大津皇子特謀反賜死、皇子尤好文□□
詩賦典自此皇子一始之

とあり、大分理解を異にするに至ったのである。本書では改定史籍集覧本の矢が交になつてゐるのであるが、本書の底本である東山御文庫本の性格を顧慮すれば、正しい措字は交であることが確実であり、矢と交の草体が時として近似するケースがあることから、改定史籍集覧本が拠つた写本が交を矢にまちがえていた可能性が大きいように思われるのである。但し本書の交通王に付された注文をみると、改定史籍集覧本の矢通王の注文より文字数がふえ、かつこの注文は『日本書紀』朱鳥元年十月庚午条の大津皇子の伝記、

及長弁有才学、尤愛文筆、詩賦之興自大津始也、

に依拠した文章であらうことが容易に推測されるのである。筆者はこれより本書の交通王に付された注文は天武天皇皇子、大津皇子の注文とみるべきで、大津皇子の注文が紛れ多少の改変がなされた上で交通王のそれになつてしまつたと解すべきだと考えるのである。かく解してよいとなると、交通王なる人物の実否についても疑つてよい余地が生ずるよう

に思われる。
ここで筆者は長屋王の事件を伝える『続日本紀』天平元年二月戊寅紀の記事、

外従五位下上毛野朝臣宿奈麻呂等七人、坐与長屋王交通並処流、自

余九十人悉從原免、

を想起するのである。ここに交通なる語があり、筆者は元来の『一代要記』には長屋王に付された注文として「王ト交通セル」しかじかの者を料処したという文章があり、鉤括弧の部分が伝写の間に交通王なる人名になつてしまひ、更に大津皇子に付された注文が竄入したとみるのである。「交通王」なる措字が「王ト交通セル」から人名としての交通王に転化することは十分にあり得るように思われる。筆者は改定史籍集覧本の矢通王が本書において交通王に校訂されかつ注文の改訂により、右のような想定に至つたのである。甚だ推測に傾いてゐると云わざるを得ないが、本書の交通王については右のように考えて大過がないのではないかと思う。猶、筆者の推測を是とし得れば、交通王に付された注文中の欠字について校勘者は「籍力」としたが、『日本書紀』大津皇子伝の文章より「筆力」としてみる余地があり、「詩賦典」の典は興が元来の措字であつた可能性があるように思われる。典より興の方が意味が通り易いことは云うまでもなからう。

以上学界を裨益することが頗る大であらう続神道大系『一代要記』を紹介し、筆者の興味の赴くままに交通王とその注文について私案を述べてみた。小口氏以下四氏の長年に渉る労苦の上に物された本書刊行に敬意と謝意を表するものである。

(菊版、(一)三四四頁・平成十七年八月刊、(二)三三三頁・

平成十八年十月刊、(三)三〇二頁・平成十八年十月刊、

各冊一万八〇〇〇円、神道大系編纂会(直販)

(もりた・てい 群馬大学名誉教授)